設楽発掘通信

No.70
令和４年
６月号

令和四年度の発掘調査が始まります

今年度も『設楽発掘通信』を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが中心となって実施する設楽ダムに関わる発掘調査についてお知らせいたします。設楽ダムに関連する工事予定地や水没する地区には数多くの遺跡があります。これまでと同様に、工事によって改変されたり水没したりする遺跡については、発掘調査を実施して出土した遺物と遺構などの記録を残す必要があります。

令和四年度は、滅失する遺跡全体を対象とする本発掘調査Ｂ（いわゆる本調査）を実施する予定です。調査を行う遺跡は、田口地区の大崎遺跡、小松地区のマサノ沢遺跡、八橋地区の滝瀬遺跡、川向地区の大畑遺跡、下延坂遺跡、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の合計六遺跡です。

発掘調査を担当する調査員は、永井宏幸・川添和暁・鈴木恵介・渡邉峻・社本有弥の五名で、株式会社アコードの支援を受けて進めて参ります。調査を順調に進めるには、地域の皆様方のご理解をいただくことが最も大事と考えています。よろしくお願いします。

また、これまでに発掘調査した遺跡のうち、整理・報告書作成業務については、川向地区の万瀬遺跡を河嶋優輝が担当します。さらに、大名倉地区の胡桃窪遺跡と大名倉丸山遺跡、田口地区の添沢遺跡、川向地区のマサノ沢遺跡と石原遺跡の発掘調査報告書については、本年度末に刊行する予定となっています。

発掘調査にあたっては、これまで通りに、設楽町田口の旧県保健所にある愛知県埋蔵文化財センター設楽事務所を拠点として、この『設楽発掘通信』を発行し、各遺跡の地元説明会などを開催して、地域の皆様に調査成果などをお知らせする予定です。どうぞお楽しみに。

（永井宏幸）

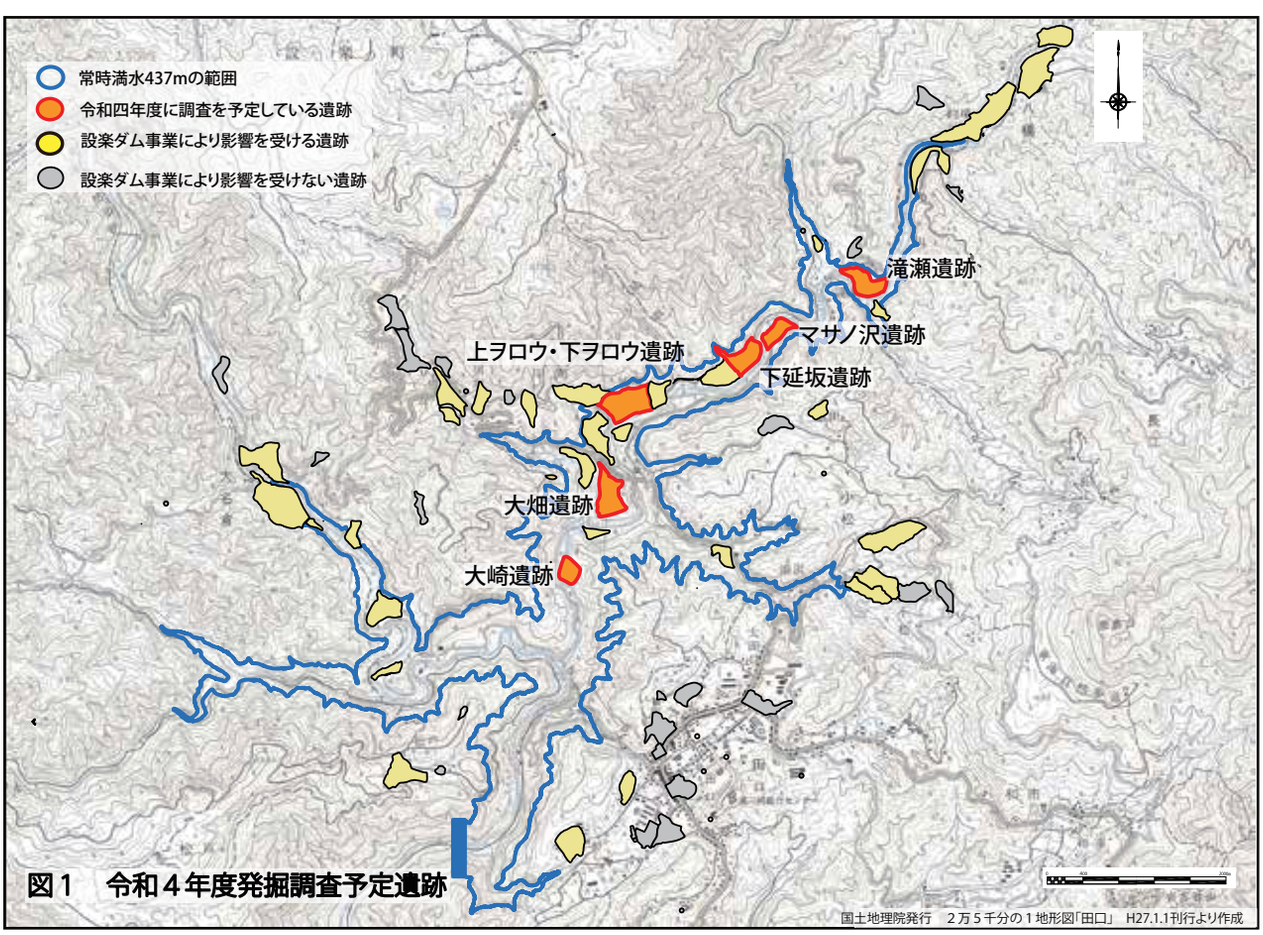

図１　令和４年度発掘調査予定遺跡

令和四年度の調査員紹介

今年度は私たちが担当します。

調査課長
鈴木正貴

二〇〇九年の範囲確認調査以来、本年度が八回目の担当となります。普段は弥富にいますが、月に一回程度は調査区にお邪魔します。専門は中近世考古学で、集落や都市の変遷を研究しています。

主任専門員
永井宏幸

昨年度までは、二〇一七年度に調査を担当したマサノ沢遺跡の整理報告を担当していました。本年度は設楽地区の調査工程を担当します。発掘調査の成果を分かりやすくお伝えしていきたいと思っています。

調査研究専門員
川添和暁

考古学を学問的背景とする埋蔵文化財調査は、常に新しい発見に満ちあふれています。しっかり調査して、いち早く皆様にお伝えできれば、と思います。今年はそのような機会も是非作りたいと思います。

調査研究主任
鈴木恵介

二年ぶりに設楽町の発掘調査を担当します。今年度は、設楽町三都橋にある内貝津橋遺跡、設楽町八橋の滝瀬遺跡を担当する予定で、過去の調査は、令和二年度の胡桃窪遺跡などの発掘調査を担当しました。

調査研究主事
渡邉　峻

昨年に引き続き下延坂遺跡を担当させていただきます。下延坂遺跡は昨年の調査により、今年度の調査区にも縄文時代の竪穴建物跡があることがわかっているので、とても調査が楽しみです。調査の成果は昨年と同様、発掘通信で随時お伝えしていきます。よろしくお願いします。

調査研究主事
社本有弥

去年に引き続き設楽ダム関連遺跡の調査を行うこととなりました。今年度は大崎遺跡とマサノ沢遺跡の調査を担当します。調査を通して得られた成果をいち早く皆様にお伝えします。

主任専門員
鬼頭　剛

地層から遺跡の立地場所の成り立ちを調べています。発掘が終わりに近づくころ、調査区にお邪魔をします。

調査研究主事
河嶋優輝

昨年度は現場での発掘調査を担当しましたが、今年は報告書作成に向けた作業を担当しています。担当の万瀬遺跡では縄文時代草創期から近現代まで幅広い時期の遺物が出土し、この土地が長く使われてきたことを物語っています。

新設楽発見伝8について

毎年、三月初旬に開催していました、設楽ダム関連発掘調査成報告会『新設楽発見伝』ですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、令和三年度もこれまでの皆様を会場にご案内しての開催ができなくなってしまいました。そこで、昨年度同様に、オンラインでの開催を企画し、オンラインによる報告会は、三月十二日から四月十一日まで、以下の様なコンテンツをご用意しました。

「令和3年度の設楽ダム関連の発掘調査について」（藤原　哲）
「上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査」（川添和暁）
「下延坂遺跡の発掘調査　その1～縄文時代晩期編～」（渡邉　峻）
「下延坂遺跡の発掘調査　その2～縄文時代中期 集落編～」（河嶋優輝）
「大崎遺跡の発掘調査　その1～中世 水田関連遺構編～」（社本有弥）
「大崎遺跡の発掘調査　その2～縄文時代・弥生時代 集落編～」（社本有弥）
「笹平遺跡の室内整理調査」（川添和暁）

図２　『新設楽発見伝８』
印刷配付資料
本誌は、愛知県埋蔵文化財センターHP からも pdf データのダウンロードができます。是非、アクセスしてみて下さい。

今回で二回目となったオンラインでの報告会では、短時間で、要点をできるだけ明確に示すように努めたところです。各コンテンツの中で、最多で九十五回の視聴をして頂きました。お礼申し上げるとともに、今後もよりよい動画配信を実施していきたいと考えていますので、ご感想などがあれば、是非、愛知県埋蔵文化財センターまでお知らせ下さい。

期間が終了したため、現在はこの動画コンテンツを見て頂くことはできませんが、印刷資料は今後も配布いたします。A四判カラー三十二頁の冊子で、愛知県埋蔵文化財センターのホームページからダウンロードできます。また、印刷資料の冊子自体は、町の教育員会あるいは愛知県埋蔵文化財センター設楽事務所（旧設楽保健所建物内）、設楽ダム工事事務所、さらには奥三河郷土館に置いてあります。冊子をご希望の場合は、いずれかに直接お越し下さい。

昨年度の出土資料は、現在、「やとみ新発見展２０２２」として、弥富市内にあります愛知県埋蔵文化財調査センター内で速報展示をしています。諸事情のため、残念ながら今年は五月末までの展示となりますが、機会がありましたら、お越しい　ただければと存じます。

（川添和暁）

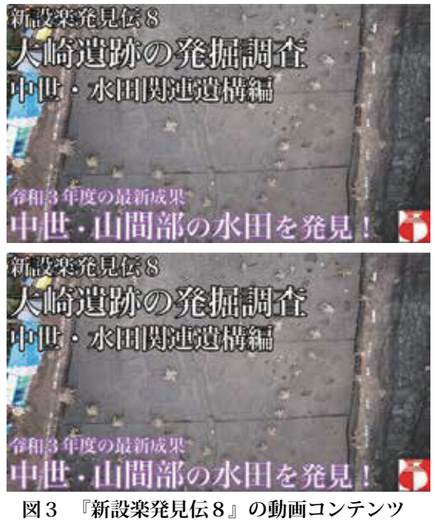

図３　『新設楽発見伝８』の動画コンテンツ
※動画の配信は４月 11 日をもって終了しました。

石原遺跡の室内整理経過報告

石原遺跡は二〇十八年度と二〇十九年度の発掘調査で、縄文時代中期前半と後期末から弥生時代前期にかけての遺構や遺物が検出されました。特に、縄文時代中期前半の遺跡は、愛知県内でも珍しく、さらに竪穴建物跡が良好な状態で検出されたのは、特筆すべき事例です。

ここでは、二〇二一年度の整理作業を通じて新たに注目される成果として、縄文時代早期中葉と中期前葉の土器についてご紹介します。

縄文時代早期中葉の土器は、土坑からまとまって出土しました（図4）。発掘当初は、周辺で出土していた土器などから縄文時代晩期ごろと考えていましたが、その後の整理作業の中で、土器に付着していた炭化物を分析にかけたところ、今から約八六〇〇年前の縄文時代早期中葉ごろの土器であることが分かりました。これにより、石原遺跡で最初に人が活動していたのは、縄文時代早期中葉まで遡ることが判明しました。

一方、縄文時代中期前葉は、分厚い器厚と口縁部や胴部に立体的な装飾を施すなど、縄文土器の中でも最も装飾が派手になる時期です。東海地方でも立体的な文様を施す土器が認められます。しかし、関東地方や信州地方の土器とは異なり、器厚が薄く作られ、文様を口縁部に集中させるなど、東海地方独自の土器が作られます。図5は、破片でまとまって出土していたものを復元した土器です。粘土紐による貼り付けの上に半截した竹を使用して、爪形の刻みを施したり、粘土紐で区画した中にヘラ状の工具で沈線を引いたり、縄を転がして文様をつけたり、多彩な文様が施されています。これらの土器も器厚が1センチ未満とかなり薄く作られています。それでも、自重で潰れず、自立する深鉢になっており、縄文人の技術力の高さがうかがえる資料です。

今回ご紹介した事例の他にも、多くの発見がありました。それらの貴重な成果を一冊の報告書としてまとめています。いずれ、皆様の前にもお披露目できるよう、進めてまいります。

（田中　良）

図4　土坑出土の縄文時代早期中葉の土器（田戸上層式併行）

図5　縄文時代中期前葉の東海系土器（北裏CⅡ式）

設楽発掘通信 No.70
令和4年6月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　株式会社アコード